

叛乱への招待

講演 講演者未定

学館運営委員会企画

5月30日 PM1:00 2番教室

70年代という「時代」の境界線の闇の中で我々は何をなさねばならないのか。60年代階級闘争が、権力の先行的な攻撃の前に漆黒の闇に包まれてしまった時、我々はかすかな薄明りを求めて胎動し始めた。67年10・8羽田闘争は、組織された暴力と、プロレタリア国際主義という内実を持ったものとして、正しく戦後支配体制そのものを突き破る闘いとして闘い抜かれていった。そして68~69年全国学園闘争の拡大は、70年代に向けた日帝の海外膨張、そして、それに対応する国内における帝国主義的社会再編、その一環としての大学の再編に対する闘いとして、つまり、政府=文部省が、63年以降、大学管理形態としてとってきた大学自身による「自己規制」という形の「国大協一私大連絡路線」に対決し、それを全面的に破綻せしめた。このことは、全国に炎のごとく広がっていった学生の叛乱が、帝国主義的社会再編に対決する質を獲得したことであり、67年10・8以降の暴力闘争の地平を継承するものとしてあったのだ。しかしながら、権力は、「大学立法」を提出することにより、全国学園闘争の全面的な鎮圧に乗り出し、その收拾過程を通して、大学に支配のヘゲモニーを確立し、70年代教育再編の足がかりを作り出した。現実的には、ほとんどの大学で行なわれている時間制ロックアウト体制として現象している。70年代教育再編は、具体的には、目的別大学化、(つまり大学院大学の設置など)そして近

代化路線を貫徹することによる大学のより一層の管理体制の整備、産業構造の高度化と、多様化に対応できる研究=教育体制の再編として現実に行進している。我々の学館解放闘争も、単に、学館が解放されればいいという問題ではなく、全学時間制ロックアウト体制、そして、現実には、明大が大学立法の実質化としてロックアウトをしてきた以上、大学立法に対する闘いとして、更には70年代教育再編に対する闘いとして、闘い抜かれなくてはならない。67年10・8羽田闘争が、新たな質を持った階級闘争の位相への飛翔として闘われたにもかかわらず、それが再び、支配秩序の円環の中に組み込まれてしまった現在、奈落の深淵に落ち込むことなく、支配構造の円環からの突出を、再度体現化していくためには、現実の71年の状況が僕達に強いている切実な課題とは何なのか、という問いに答えねばならない。「情況」とは？

三里塚農民の激烈な闘いが我々につきつけている問題ではないだろうか。関東ローム層の上に展開している情況は、我々の「言葉」を風化させてしまう。農民の「生活」の重みに、僕達の「言葉」が耐え切れないのだ。70年代の桎梏の闇の中に新たな時代の夜明けを告げるには、この重苦しく、困難な情況を通り抜けねばならない。生活過程の対象化から戦後支配構造を見ずえることにより、我々は、近代市民社会の解体を押し進めることができるだろう。

サービスをモットーとして ご奉仕を心掛けて居ります		盟 食 会 加 盟 店				
喫茶とお食事 二階雀荘 あけぼの TEL(三三二)七四一〇	明大前ストア隣り	明大前北口すずらん通り	味のとんかつさ 大衆中華松 TEL(三三二)五四〇二	明大前駅前 大衆食堂 ふじや食堂 美味しい 定食の店 TEL(三三二)八三三二	中華料理 榮 明大前通り TEL(三三二)八五三九	中華料理 明大軒 TEL(三三二)八六七四